

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
早稲田大学 理工学部 情報学科

第31回「キーボード談義」

【道具に凝るか、肩が凝るか】

どのような分野にも道具に凝る人がいる。いわゆるマニアとまでいなくても「××にはちょっとうるさい」人たちである。一方で道具に無頓着な人もいる。「弘法、筆を選ばず」というわけだ。パソコンの世界でもブランド信仰があるし、それを利用した商売戦略が成立している。また、DOS/Vのパソコンを自分で組み立てるマニアには、マザーボードの選択から始まる無限の楽しみが残されている。

パソコンはデジタル機器であるから、カタログの上で機能を比べてみても、どれも遜色ないように見える。しかし、私自身の経験でもディスプレイとキーボードの選択は仕事の能率に思った以上に影響する。

ディスプレイが見にくいと目が疲れる。疲労の具合には個人差があるようだ。敏感な人は用心したほうが良い。またキーボードも馬鹿にはできない。妙な配列のキーボードを使うと、タッチタイプが裏目に出て入力を間違えてしまう。「あれ、あれ」と言っている間に無駄な時間が経過していく。

【キーボード戦争、JIS対ASCII】

キーボードの問題は、実は根が深い。というのも基本的な配列が2種類あるからだ。日本で普及しているのはJIS型配列である。これは昔のASCII型を原型としているが、現在アメリカなどで普通に使われているASCII型とは記号類の配置などが異なる。

私の研究室では、米国製ワークステーションとパソコンとを併用していることもあり、ほとんどのパソコンにはASCII型のキーボードを付けている。

筆者がNTT研究所に勤務していた頃、先輩の竹内郁雄氏（現電通大教授）は「JISキーボードはダメだ。撲滅するためにキャンペーンをしよう」と呼びかけ、雑誌bitで『キーボード談義』という連載記事を企画した。私も執筆に参加した次第であるが、その努力もむなしく、JISキーボードは広がるばかりであった。

実際にJISキーボードには使いにくい点がある。私自身は日本語をローマ字で入力するため、JIS型のご利益(りやく)は感じない。

例えばJIS型の右手中段のキーはJ K L ; : 7 と並んでいて、その右にEnterがある。

ASCII型ではJ K L ; ' の右がEnterなので、1つキーの数

が少ない。これは右手の下段でも同じであって、右のShiftキーの左側にJIS型では[] が余分にある。

このキーの数の違いが、盤面を見ないで打つ時の誤りの原因になる。さらに最近のラップトップパソコンのキーボードでは、1つ余分なキーがあるためか、キーの横幅を妙に縮めたものがある。特定のキーだけが狭幅になっているのは、何とも奇妙な、気の毒なような感じがする。

【栄光のVT-100】

米国式のASCII型を好む人がほぼ標準と見なしているのは、SUNワークステーションのキーボードだろう。そのSUNのキーボードの原型は、DECのVT-100という端末のキーボードである。私はSUN-1が日本に初めて輸入された時のことを覚えている。SUN-1は色が黒であった。キーボードも黒で、その配列はVT-100にそっくりであった。ただしキーを押した時の感触は別で、事実あるキーを押下することができないという欠陥があった。

VT-100といえば、今日でも端末エミュレータ、つまりエスケープ(ESC)シーケンスの標準として名前が残っている。インターネット時代にも引き継がれているのは凄い。

ただし、当時のVT-100は英文字専用の端末であって、画面の上で漢字が表示可能になったのはずいぶん後のことである。

昔話だけでなく、新しい話題にも触れておこう。この文章は先ほどからマイクロソフトのナチュラルキーボード(ASCII型、メキシコ製)を使って書いている。このキーボードは見た目が風変わりであって、普通のキーボードを左右に引き裂いたような配列になっている。さらに普通のキーボードでは奥の方を持ち上げて高さを調節することが多

いが、このナチュラルでは手前側を持ち上げるリストレバーというものが付いている。手前を持ち上げる意味がよく理解できなかったが、実際に試してみると、リストレバーを使ったほうが調子が良い。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp